

学 位 論 文 の 要 旨

学位記番号	※第 乙第 51 号	氏 名	小 椋 愛 子
論文題目	『榻嶋暁筆』の構想—先行説話の摂取方法を手がかりに—		
<p>『榻嶋暁筆』（以下、『暁筆』とする）は、大永（一五二一～一五二八）、享禄（一五二八～一五三二）頃に成立した、雑纂的な説話集とされているが、未だに作者も特定されず、成立年代も、定説にはなり得ていない作品である。作者については、江戸時代に、「一條兼良」説や、日蓮宗の僧侶説、なかでも「日信」説などが提唱されたが、いずれも確定には至らず、その当時からすでに不明であったことが窺える。『暁筆』は、夙に市古貞次によって、平成四（一九九二）年に三弥井書店から刊行されたが、それ以前に『暁筆』全体に対する言及は、辞書類の他には、ほとんど見られず、それは論文についても同様で、研究の浅い作品である。『暁筆』の全体像を考察するには、各説話の出典研究や全体の構造、構成に関する研究が不可欠である。そのため、本論文では、『暁筆』所収の説話の摂取の方法、いわゆる受容と変容の仕方を検証し、その構成を考察することで、『暁筆』の文学史上の位置を考察することを目的としている。</p> <p>本論文は、『『榻嶋暁筆』の構想—先行説話の摂取方法を手がかりに—』と題して、四篇十七章から成る。</p> <p>第一篇では、『『榻嶋暁筆』の形式と構成』と題して、『暁筆』全体に及ぶ、形式や構成を考察した。全体に及ぶ形式として、「本文」に対して、「二字下げ」の形式で付される「別記文」に着目し、それが、『暁筆』成立当時から存在したことを確認した上で、その意味や役割について考察した。そして、別記文は、「本文」の敷衍、批評、総括、視覚的な区切りなど、さまざまな意味や役割を有し、「本文」の単なる補足ではなく、別記文も含めて一話であることを指摘した。また、『暁筆』は、巻二十三巻中、その大部分に、巻の表題が付され、それに合わせて各説話を収録するが、別記文は、この解釈を強調する働きをも有しており、『暁筆』全体の説話の論述方法と関わっていた。</p> <p>続けて、『暁筆』の各説話の構成、論理展開と、巻の説話配列に着目し、全体を概観した。まず、巻一を基として検証し、巻一の各説話は、提示した諸説を順に取り込む形で末尾を仏教で統括していること、なかでも法花本門の思想をもって結論としていることを確認した。また、それは巻の説話配列と相関し、その傾向が、全体に及んでいることを指摘した。これらのことから、作者が、巻に所収の各説話を仏教で統括する意図を持って編集していることを明らかにした。</p> <p>さらに『暁筆』全体の構成を考察する中で、最終話である「鼠物語」に着目した。これは、「鼠の嫁入り」の話を基として、それに、さまざまな例証を添加していて、『暁筆』中、最も長い一話である。ここでは、これらの例話が、『暁筆』内ですでに提示されている説話の要約になっていること、そしてそれは、読者に『暁筆』の既出の説話を想起させ、『暁筆』全体の索引、見出しのような働きを持っていることを指摘した。これは、「鼠物語」の内容である「元に戻る」と合わせて、『暁筆』全体の読み方を示唆し、読みの循環を促し、さらには、全体を回顧させる。また、「鼠物語」の末尾は、「序」とも対応し、これは、最終話であると同時に、事実上の跋文であり、読者にこの作品の読みを提示していると結論づけた。このように第一篇では、『暁筆』はさまざまな説話を収録しているため、雑纂的に見えるが、各説話や巻の末話を仏教で総括し、全体を仏教で統括するという、編集意図が確固として存在していることを明らかにした。</p>			

様式 B

第二篇では、『楊鳴暁筆』の成立（上）」と題して、和書からどのように先行説話を摂取しているのか、さらに、典拠と摂取する説話との間にどのような関係があるかを考察した。ここでは、『暁筆』が多くの記事を摂取している『三国伝記』（以下、『三国』とする）、表現の類似が見られる『撰集抄』、さらに、一話全体の著者として、話中に名前が記される「鴨長明」の著作を取り上げた。そして、典拠とする資料によって、摂取する内容が異なること、『暁筆』作者が、摂取する記事の内容に合わせて、典拠を選択していることを明らかにした。典拠から忠実に摂取するという姿勢は共通するが、典拠とする作品によって、摂取する内容やその引用の仕方に違いが見られる。『暁筆』は、収録する多くの説話に典拠を有し、その出典が記される場合があるが、それは経典や漢籍で多く、原則として和書ではなされない。しかし、『三国』の場合は明記されることがあり、引用する記事の数やその方法と合わせて、作者が重要視していたことを示している。

このように、全体として、和書では、『三国』を重視する傾向があるが、摂取する内容に合わせて典拠を選択し、それぞれの典拠の特性を生かした摂取をしており、その編集姿勢には、一貫性があることを指摘した。

第三篇では、『楊鳴暁筆』の成立（下）」と題して、仏典や漢籍からの摂取の仕方やその方法を考察した。前半は、『法華経』と関わる箇所を中心に、経典や仏典をどのように摂取しているかを検討した。そして、『暁筆』全体に『法華経』に関連する語が散見すること、その中でも「本門」優位の姿勢があること、さらに、他の経典と比べてそれは、総括部分で引用され、他と区別されていることを指摘した。また、このような傾向が見られる中で、日蓮や日蓮宗の僧侶の名は記されず、不自然であったが、出典を調査すると、日蓮著作から摂取していると考えられる箇所が複数存在していた。敢えて、日蓮の名や著作名を記さず、それを「仏家」の説として提示していることから、作者が、この説を自明のこと、普遍的なこととしてとらえている姿勢が窺えた。さらに、仏典からの摂取を考察する中で、類似した説話を二話続けて配列する箇所に着目し、その意図を摂取の仕方から論じた。その結果、仏典は、類書からではなく、原拠から引用していること、類似した説話を並べて配列する時には、敢えて類似点が際立つように引用していることが明らかになった。ここでは、二話配列することで布施の行為の変遷を示すなど、作者が、意図を持って配列していることが理解された。

後半では、陰陽書などの摂取の仕方や説話中に出現として漢籍の書名が明記されている話を取り上げ、典拠との関わりを検証した。そして、漢籍については、『暁筆』説話中に「史記」や「漢書」などの書名が明記してあっても、原典から採っているのではなく、「和漢朗詠集」の注釈書、「和漢朗詠集永済注」等に拠っていることを指摘した。『暁筆』話中の出典明記も、依拠資料にあるものをそのまま摂取していた。仏典は、直接原典を確認しているのに対し、漢籍は、間接的な引用であり、その内容が原典と異なっているにもかかわらず、そのまま摂取する。仏典の場合には、僅かな異同でも言及があるため、注釈書の記述の誤りに気づいていないと推察できる。作者は、仏典には精通しているが、漢籍にはそれほど通じておらず、漢籍の学問を体系的に学修した者ではないことが理解された。このように、仏典と漢籍では、摂取の仕方に大きな違いが見られた。

第四篇では、『楊鳴暁筆』の諸相」と題して、時代の一時期を反映していると考えられる説話を取り上げた。例えば、大神式賢が「皮笛」についての説を述べる一話では、「源氏物語」の注釈書である『河海抄』に類似の記事が見られるが、それ以後のものに、この説は踏襲されない。大神式賢は、複数の説話に登場し、当時、人とは異なる行いで注目を集める存在であったようであるが、その人物像が記憶にある間は、これらの説話は機能し伝承されるが、それが薄れると、流布しなくなるのではないか。このように時代を反映するようなものを、この篇では論じた。

様式 B

さらに、『暁筆』中に、その作品全体が収録されている連歌書、「肖柏口伝之抜書」について取り上げた。これは、この書の奥書や『暁筆』諸本の問題から、『暁筆』が書写される中で紛れ込んだものと想定されるが、そこに収められる連歌は、宗長のものが多く、永正、大永の頃のものを中心であった。連歌書の性質から、この書の成立は、宗長全盛期から没後でも直近と推察できるが、これは、『暁筆』の成立時期と重なる。また、『肖柏口伝之抜書』の項目やそこに引かれる句から、連歌伝書に着目した。そして、連歌伝書では、踏襲されて伝えられる共通の項目があること、それらは、項目等の枠組みを同じくして継承され、さらに、時代を経ると、その項目の枠組みは変わらないが、そこで提示される作例の例句が、その時代に合わせて変化していくことなど、連歌伝書の成立過程について考察した。これも宗長の頃から変化が見られ、その時代の一端を現していた。このような時代性と『暁筆』は無関係ではないと考えられる。

以上のように、先行説話の摂取の仕方から、『暁筆』は、雑纂的な説話集と言われるが、仏教で総括するという意図が明確であり、作者が意図的に、編集している姿勢が窺えた。

中世は、中世日本紀や、中世古今注など、「創る」時代であると言われるが、『暁筆』は、先行説話を忠実に摂取しており、一見すると、積極的に本文を創作していないようにも思われる。しかし、典拠を忠実に摂取しながら、他書から摂取した記述と組み合わせて、元の説話とは異なる形で提示したり、大部分は忠実に摂取しながら、そこに独自の文を添加することで、解釈や視点を変えたり、敢えて意図的に摂取しないことで、元の説話とは解釈をずらして読者に提示する。さらに、この傾向は、形式や構成についても同様で、別記文という、古くからある形式や、「巡物語」の構成など、いずれも前例があるものを、組み合わせている。このように、融合させて作品を創ることが『暁筆』作者にとって、「創る」行為であり、新しい試みであり、目的であったといえよう。『暁筆』は、従来の説話をそのまま受け継ぐのみならず、何かしら、その解釈に求められる論証、異説、関連話などを添加する。このような興味、関心によって『暁筆』は、仏教で総括する意識をもって編集された仏教説話集でありながら、様々なものを内包した結果、類書的な面が現れている。そして、これが「中世の知の体系」の一端であり、時代性といえよう。

(4177 文字)